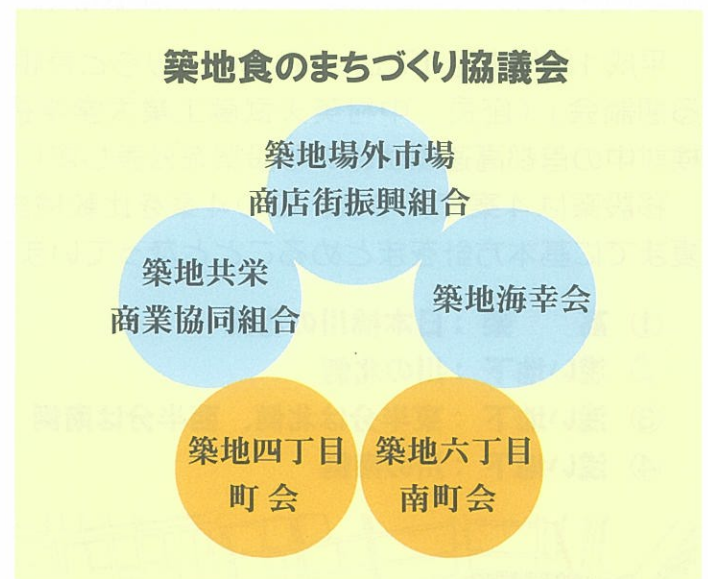


『築地食のまちづくり協議会』発足 ～場外市場関係団体が結束～

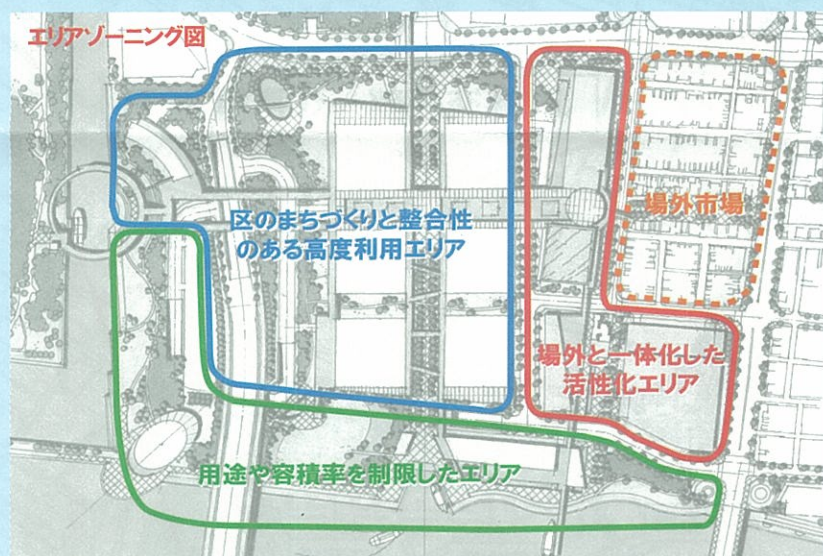
平成18年1月16日（月）、市場移転後も「築地」の灯が消えることなく将来にわたる活気を築いていくために、場外市場に関係する商業団体と町会とが一つにまとまって「築地食のまちづくり協議会」を発足させました。

新たな協議会は、平成16年12月に区より提案された「築地市場地区の活気とにぎわいビジョン」を受けて、自らが主体的にまちづくりに取り組んでいくことを目的に、発足したものです。

この協議会では、①築地ブランドを高めるための取り組み、②場外市場地区への集客を高めるための取り組み、③顧客サービスの向上、④各団体の交流などを主な取り組みとしています。



■築地市場地区の活気とにぎわいビジョン（平成16年12月）



- ①エリアゾーニングにおける敷地利用
場外市場と一体化した活性化エリア、用途や容積率を制限したエリアなどに区分
- ②築地を継承する鮮魚マーケットの整備
プロも利用できる鮮魚マーケット
- ③築地が持つ食文化の発信拠点の整備
食文化の教育機関等の整備
- ④浜離宮庭園との連携・一体性の確保
- ⑤水際を活用した魅力ある散策空間の整備
回遊性・連続性、水上交通拠点の確保
- ⑥周辺地域との観光機能連携
新しい都市観光の目玉づくり等

『築地市場移転に断固反対する会』方針の転換

平成18年2月17日（金）、中央区役所にて「築地市場移転に断固反対する会」総会が開催されました。総会では、場外市場の活性化に向けた取り組み報告とともに、今後の運動方針について活発な意見交換が行われました。

東京都の移転計画に一貫して反対してきたこれまでの会の方針を転換し、築地市場跡地利用などについて東京都との交渉の場につけるようにすることが確認されました。

また、会の名称も「断固反対する会」から「新しい築地をつくる会」へ変更されました。



いま、中央区では築地市場移転問題とともに、日本橋上空から首都高速道路を移転させることが大きな話題となっています。単に撤去、付け替えを行うだけではなく、周辺地域で進められている都市再生プロジェクトや再開発事業との連携を図りつつ、都心の再生とともに、水辺の環境を併せて改善できるよう様々な話し合いが行われています。

日本橋川上空の首都高移設検討案発表

平成18年1月17日、「日本橋 みちと景観を考える懇談会」（座長：中村英夫武蔵工業大学学長）は、検討中の首都高速環状線の移設案を公表しました。

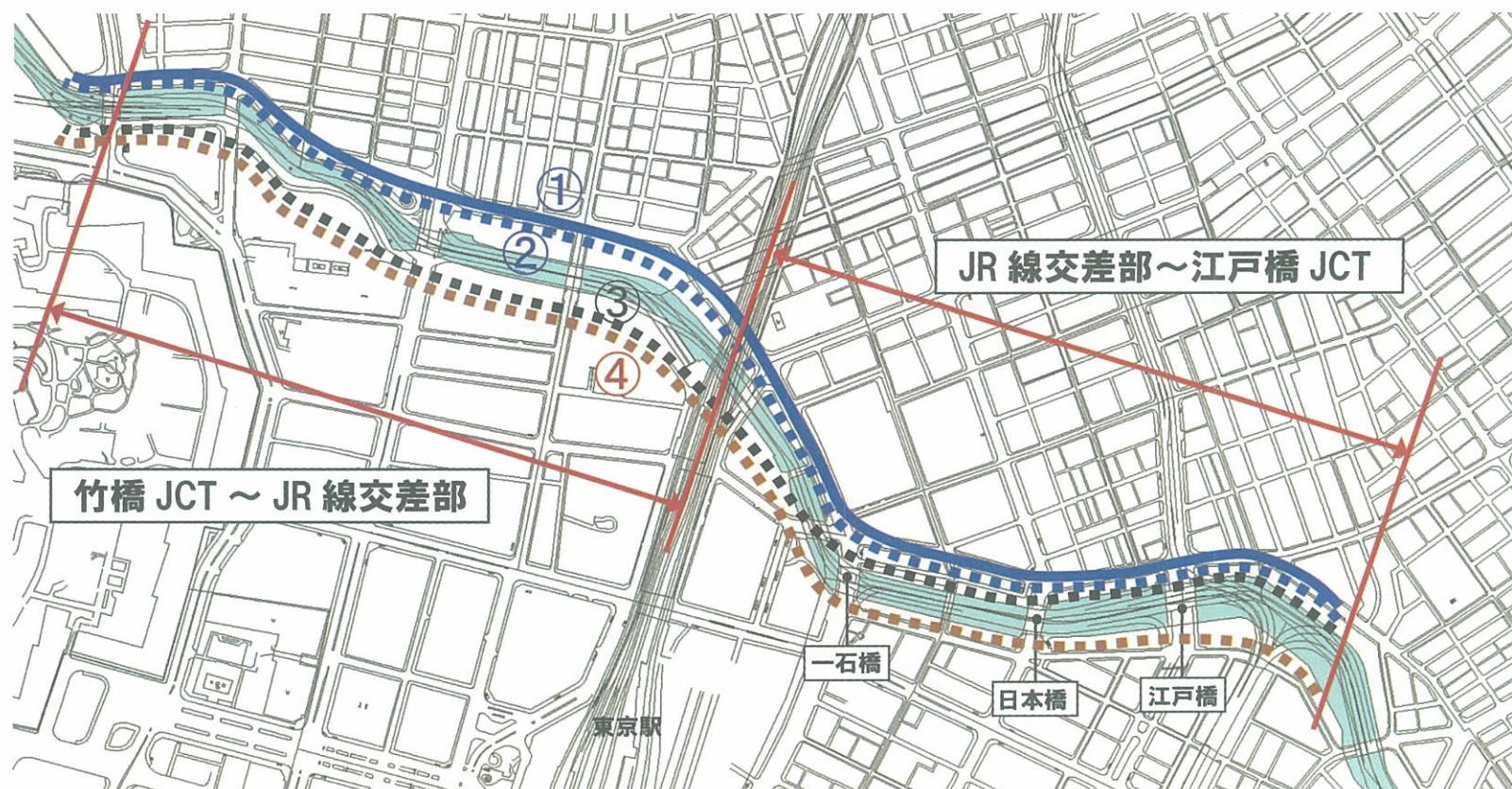
移設案は4案で、今後、この4案を比較検討して、夏までに基本方針をまとめることとなっています。

- ① 高架：日本橋川の北側
- ② 浅い地下：川の北側
- ③ 浅い地下：東半分は北側、西半分は南側
- ④ 浅い地下：川の南側

日本橋 みちと景観を考える懇談会

同懇談会は、2002年度まで2年間設置された「東京都心における首都高速道路のあり方委員会」の後を受け継ぐ形で、2003年に設立されました。日本橋川を軸としたまちづくりを前提として、首都高速道路を移設する可能性について検討してきました。

メンバーは小林重敬横浜国立大学大学院教授、隈研吾慶応義塾大学教授ら学識経験者に、「名橋『日本橋』保存会」「日本橋地域ルネサンス100年計画委員会」など地元のまちづくり団体も加わっています。



かつて日本橋には「魚河岸」があった・・・

江戸の頃、日本橋川や隅田川の下流地域は、江戸湊と呼ばれる巨大な物流拠点となっていました。この江戸湊は、発達した運河網や荒川水系、利根川水系などを通じて関東全域や江戸湾を経由して日本各地と結ばれていました。江戸には約70もの河岸があったと言われています。河岸とは町人専用の「河川の港」のことを言い（武士利用は「物揚場（ものあげば）」という）、そこには市が立ち、倉庫や問屋が建ち並ぶなど、人・物・金および情報が集まる物流拠点として、江戸の生活を支えていました。

その中でも、本船町の南河岸（現在の室町、日本橋から江戸橋の間の河岸）には魚市場が並び、房総や相模から鮮魚を積んだ船が集まり、魚河岸としてにぎわっていました。

関東大震災後、魚市場が築地に移るまで、江戸・東京の河岸と言えば「日本橋」でした。

